

Urban Design Lab. Magazine

2017.06.30 vol. 254



彼方より続く足跡

L o o k i n g B a c k O v e r t h e P a s t .

東京大学
工学部都市工学科/
工学系研究科都市工学専攻
都市デザイン研究室

<http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/>

新企画「マガジン版-自著を語る」、始まる！

p.2

特集-研究室の系譜-

Ⅰ. 都市デザイン研究室を辿る

p.4

Ⅱ. 学びの場の広がり

p.6

Ⅲ. 現在をつくる礎-各地の研究室から-

p.8

号外！ UDC コンペ国交大臣賞受賞！

p.12

編集長：松田季詩子

編集委員：神谷安里沙 田中雄大 中村慎吾

岡山紘明 但馬慎也 中戸翔太郎

新企画『マガジン版 - 自著を語る』、始まる！

Looking Back on Prof.Nishimura's Lifetime with his Books

今年度いっぱいで退官される西村幸夫教授。我々マガジン編集部では西村先生の半生を今までの著作と共に振り返る連載企画『マガジン版 - 自著を語る』を始めます。今回は書籍についての話はありませんが、先生の人生で一番大きな転機である大学院生時代についてインタビューしました。(聞き手：M2 神谷・田中・松田, M1 但馬 / 編集：神谷)



環境に馴染めなかった学部時代

小学校から高校の時はクラスの人々を知っている安定した人間関係の中で楽しい学校生活を送っていたのですが、東大に入ってから知らない人ばかりで、教室で会う人もばらばらでした。地方から出てきたこともあり、大学の中に親しい友人ができる雰囲気ではありませんでした。東京の雰囲気そのものに違和感があり、大学を楽しいと思えたことがなかったのも、新しい人間関係と、東京にどうやって慣れていくかが大変でした。

違和感を感じた都市工学専攻

僕は数学が出来たので何の疑問もなく理科系に行ったけれど、文学青年でもあったので、高3の時は理Ⅰに行くか文Ⅲに行くか悩みました。結局、理科系に進んだのだけれど、社会的関心が高かったから社会との接点があるような分野に行きたいと思っていて、それが都市工学でした。だから都市工へ進んだことには満足して、本郷に楽しく通いました。ただ、都市工は大学の中でも特に大学紛争が激しかったので僕らが講義を受けてた時はほとんどまともなカリキュラムじゃなかったし、演習も放任主義でした。同時に、都市工学が学問分野としてまだ確立されていなかったため、どの講義もいつもエベネザー・ハワード

ぐらいから始まって同じようなことを話している。ずっと都市に関する関心はあって、やりたいと思っていたのだけれど、「こういうのは違う」と感じて、そこでも馴染めませんでした。僕は必要最低限しか都市工の講義に出ていなかったから、当時の僕を知っている同級生は印象が無いと思います。2度留年して、その間に大学院入試も受けたのだけれど、授業に出ていなかったから試験勉強もよくわからなかった。

勉強したいという思いはあるんだけど、やりたいことと今受けている教育が違っていた。周りに仲間として話ができる人もいなかったから、まちを旅行したり色々な本を読んでいた。そんな状態で学部生時代を6年間過ごしました。そんな中で唯一話をしていたのは、指導教官の大谷先生(※1)でした。

プロジェクトに没頭した修士生活

非常に違和感がある中で大学院に進むことになり、大谷先生の所に行くことにしました。大谷先生を選んだのは「一番信頼できる先生につきたい」と、ただそれだけの理由でした。

僕らが研究室に入った年からプロジェクトが始まりました。奈良県橿原市今井町で伝建地区(★)の整備のあり方を考える国交省の大きなプロジェクトで、様々な大学の人達が参加していました。僕は同期の後藤哲男君

(※2)と大体ペアでいろいろな作業をやり、他のメンバーと共に今の研究室のような雰囲気プロジェクトをやっていました。当時はそれが唯一のプロジェクトでした。現場に行き一緒に作業して、議論をして夜まで仕事をしました。その中で、各々の得意分野やまちに対する見方が違うから、「一人一人で作るよりもはるかに先に進める」、「1 + 1 = 2 以上になるんだ」という実感がありました。昔も今のジュリーみたいなものがあつたのだけれど、いつも後藤君と2人で2人分の時間を使ってプロジェクトの発表をしていて、最後の3か月間だけ自分の修論に取り組みました。修論も今井でやったのだけれど、みんなとやっていることと差別化するために、僕はこのまちがどうして現在の形になったかという都市形成史を仮説を交えて論じました。いずれにしても2年間ほとんど今井しかやっていないですね。



研究室プロジェクトの意味

プロジェクトのようなことが僕が今まで求めていたものだ、これならずっと続けられるんじゃないかと思いました。その時、僕はプロジェクトに救われたという感じがして、この道に行こうと決心しました。

だから大学院へ進学したことは本当に大きかったです。プロジェクトがなくて大学院へ通っても、論文は一人で書くものだから「それぞれ研究を勝手にやるように」と言われていたら、現在の仕事はできていませんでした。大学に残っていなかったと思うし、この道に進もうとも思わなかったかもしれないです。

その代わりほとんど毎日12時過ぎの終電まで残っていましたね。とにかく大みそかも元旦もいて、365日研究室の灯を消さないということをやっていた。でも、それぐらいやっても全然苦じゃなかった。

僕はプロジェクトに救われたから、プロジェクトには絶対何か可能性があるということを感じていました。だから僕が研究室を持ったらプロジェクトはやるうと考えていたのです。学生にプロジェクトの中で育ってほしいと思っていて、それを今まで続けています。

新しい時代を拓く楽しさ

歴史的な町を研究するという選択肢は、当初僕の中でそれほど意識的ではありませんでした。でもやってみると知らないことが非常に多くて面白かった。

今井町に行き初めて思ったのは、町家ってウナギの寝床みたいな形で、坪庭がありますよね。僕は都市の郊外で育ったので、このような都市の住宅と生活は非常に新鮮でした。でもこういう形式を我々の時代はつくりだしていないんですよ。公団住宅ができ、タワーマンションや戸建て住宅もそれなりに出していない。近代の我々がやってきたことは都市に対して、一体どれだけ貢献してきたかと思うようになりました。

現場では、人格全てをかけて動かないといけない

今井町のような歴史的な町から学ぶことが多いと思ったので「しばらくはこういうことをやるう」と決めました。また、伝建制度が75年にできたので、当時は歴史的町並みに関する研究の初期でした。つまり日本中で初めてこの分野の研究をやり始めたんです。日々の作業の中で新しいアイデアが湧いてくるわけです。先にやった人がいないので、前例や先行研究は無いけれど、僕は何も無いところを自分で模索しながら進むのが好きだったので、フロンティアを開拓している実感がありました。日本の中では、このような研究は京都大学のチームと歴史の先生方が建物単体に関してやっていくらいだったので、ゼロから考えてきて本当に楽しかったですね。

ただ将来に対する展望は全くありませんでした。僕はこのようなテーマの講義は受けていないし、日本中のどこにもそんな講義は存在しない。研究していてもポストが無いということなのです。新しい時代や学問領域を拓いていく感覚があり楽しかったけれど、将来はどうなるのかわからなかったです。

同時に、大都市と小さい都市ではいろいろ違っているということも学びました。僕は九州の大きな都市育ちなので、もし小さい集落の中で暮らしていたらこのような感覚なのだと思います。それも1つの転機になったかも知れませんが。

現場が一番の“先生”

プロジェクト参加時に一番頼りになり、学ばせてもらったのは各地で頑張っている町並み保存の人たちといった活動家でした。だから僕はそんな活動家の人たちが先生ですね。

今から40年前、ちょうど大学院に入った時に「全国町並みゼミ」というのが始まって、今まで試行錯誤していた各地の活動団体と行政が、初めて全国から一ヶ所に集まって話をするようになりました。2つ上で研究室でこの分野のリーダー格だった福川裕一さん(※3)と他のメンバーで行きました。

僕らは学生として行っていたから、現地で

が一番若い世代でした。「学生さんたちがこんなことに関心を持ってやってくれている」と大事にしてくださいました。だから日本中の活動家の人たちと知り合いになれたし、そこで出会った人たちが僕にとって先生です。今年で40回を迎えるけれど、今でもボランティアでほぼ欠かさず行っています。

活動家の人たちは人間的にも非常に立派な人が多かった。何かかという、都会ではあるテーマのもとに一時的にみんなが集まり議論するのみだけれど、田舎でこういう問題に取り組むときには、みんなこの人が人間的に信用できるかということを日々の生活の中で知っている。信用がなければ、どんなこと言っても無理なんですね。やらねばいけないことをサボっているとか、別のところで遊びまわっているような人が「ここが大事だ、守ろう」なんて言っても全然だめ。つまり活動は人格の全てをかけて行うものなのです。それが出来る人がおのずとリーダーになっていく。現場では、人格全てをかけて動かないといけないということを知りました。

最後に

研究のための研究ではなくて、現場の活動や生活を支えるための知見が、普遍的な学問価値を保つ研究はないかとずっと考えてきました。その意味でも現場の人と付き合えてよかった。しかし、ここまで来られたのは例外的ですね。将来の展望もなく、ポストもない中で、ポストを探す作業もありやっていなかった。本当に感謝しないといけないと思います。■

※1: 大谷幸夫氏(1964-1984 東京大学都市設計研究室) → pp.4-5『都市設計研究室、都市デザイン研究室を辿る』
※2: 後藤哲男氏(現 長岡造形大学教授)
※3: 福川裕一氏(現 千葉大学名誉教授)
★: 伝統的建造物群保存地区
1975年、文化財保護法の改正により発足。全国に残る歴史的な集落・町並みの保存に用いられる。また、市町村からの申出を受けて、国が特に価値が高いと判断したものは重要伝統的建造物群保存地区に選定される。今井町は1993年に全国37番目の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

『マガジン版 - 自著を語る』

2017年度新連載企画『マガジン版 - 自著を語る』では、合計4回にわたって西村先生の寄稿文を掲載します。内容は、西村先生の転機となった出来事や先生の書籍執筆と絡めた内容となる予定です。誌面を取り上げる書籍は記事掲載時に明らかになります。お楽しみに！

都市デザイン研究室を辿る - 研究室の系譜 特集 1 -

The Genealogy of the Urban Design Lab.

1962 都市工学科発足
1964

1970

都市設計研究室

丹下 健三

1962

88 7 4

大谷 幸夫

1964

渡邊 定夫

1976

1984

1984

山田 孝

1985

西村 幸夫

1988

1990

1997

2000

都市デザイン研究室

2010

2017

1962 年に研究室が発足してから約半世紀、55 年の月日が流れた。その間、多くの学生が研究室の門を叩き、現場での実践と研究活動に打ち込み、去っていった。卒業生の中には、研究室を離れた後に他の大学へ移り、研究室を持つ者も数知れない。

今号は、現在、大学で教鞭をとる卒業生に焦点を当てる。全国津々浦々、時には海を越え、学部を超え、都市を学問するフィールドは広がっている。自身の研究室を持つ彼らが、どのような環境で、どのようなフィールドで活躍しているかを通して、長い歴史を持つ私たちの研究室の広がりを見ていきたい。

特集

研究室の系譜 - 継ぎ展べる場としての研究室 -

都市デザイン研究室を辿る - 研究室の系譜 特集 1 -

pp.4-5

系譜の広がり - 研究室の系譜 特集 2 -

pp.6-7

西村研究室から、津々浦々へ - 研究室の系譜 特集 3 -

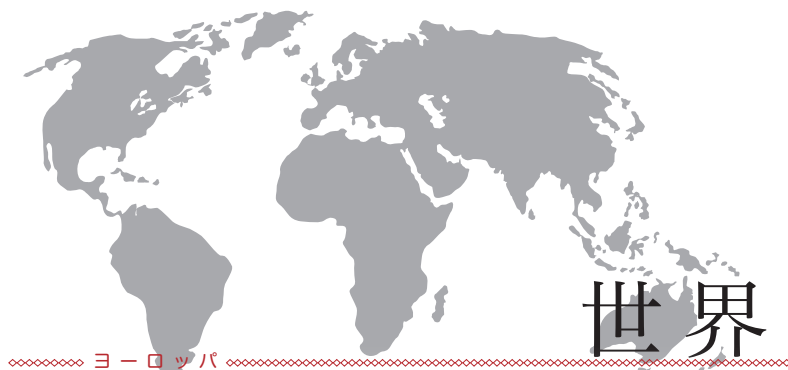
pp.8-11

※背景の写真は、今年3月の研究室大掃除にて発掘された都市設計研究室時代のものです。



学びの場の広がり - 研究室の系譜 特集2 -

So Many Alumnus, So Many Laboratories!



世界

ヨーロッパ

France
Mavoungou Tchapi-Mireille 2014

Germany
Christian Dimmer 2007
早稲田大学国際教養学部 助教

東アジア

Nepal
Bijaya SHRESTHA 1998
PROF. ASOC TEACH
Electrical & Computer Engineer

China
張松 1996

韓 昊英 2007
浙江大学 教授

Bangladesh
KHAN Tariq Mahbub 2011

張天新 2002

Korea
崔宣珠 1992

傅舒蘭 2012

李政炯 1998

東南アジア

Thailand
Yongtanit Pimonsathean 1993
Professor of Architecture, Thammasat Univ.

Niramorn Piadaeng 2005
Department of Urban and Regional Planning, Chulalongkorn Univ.

ISSARA THUMNOON Wimonrart 2008
Department of Urban and Regional Planning, Chulalongkorn Univ.

Tiamsoon Sirisrisak 2010
Mahidol University

VICHIEPRADIT Pornsan 2012
Department of Urban and Regional Planning, Chulalongkorn Univ.

PUNNOI Nattapong 2012
Department of Urban and Regional Planning, Chulalongkorn Univ.

Malaysia
Syed Zainl Abidina IDID 2006
Professor
Universiti Teknologi Malaysia

Vietnam
Pham Thuy Loan 2002
Associate Professor,
Hanoi Univ. of Civil Engineering

TRAN Thi Lan Anh 2004

LE Quynh Chi 2009

福岡県

秋本 福雄 1977
九州大学大学院工学府 都市環境システム工学専攻 名誉教授

黒瀬 武史 2014
九州大学人間環境学研究院・工学部建築学科建築学 准教授

江口 久美 2011
九州大学 持続可能な社会のための決断科学センター 助教

佐賀県

三島 伸雄 1995
佐賀大学大学院工学系研究科 教授

熊本県

堀池 秀人 1980 (2015年逝去)
熊本大学大学院自然科学研究科 教授

鄭 一止 2012
熊本県立大学環境共生学部居住環境学科 准教授

新潟県

後藤 哲男 1983
長岡造形大学建築・環境デザイン学科 教授

岡崎 篤行 2000
新潟大学工学部工学科 教授

松井 大輔 2012
新潟大学工学部工学科 助教

愛知県

松本 篤 1977
愛知産業大学 造形学部建築学科 教授

服部 敦 1991
中部大学工学部都市建設工学科 教授

浅野 純一郎 2000
豊橋技術科学大学建築・都市システム学系 教授

今村 洋一 2007
椋山女学園大学文化情報学部文化情報学科 准教授

京都府

山岸 常人 1977
京都大学工学研究科建築学専攻 教授

阿部 大輔 2006
龍谷大学政策学部政策学科 准教授

大阪府

丸茂 弘幸 1987
関西大学工学部建築学科 教授 (退官)

木下 光 1999
関西大学環境都市工学部建築学科 教授

静岡県

根本 敏行 1983 (2016年逝去)
静岡文化芸術大学 名誉教授

花澤 信太郎 2005
静岡文化芸術大学大学院デザイン研究科 教授

宮脇 勝 1995
名古屋大学大学院環境学研究科都市環境学専攻 准教授

和歌山県

永瀬 節治 2009
和歌山大学観光学部観光学科 准教授

教鞭をとる卒業生が持つ研究室は日本と世界の各地に広がっています。そのフィールドは建築・都市に関する学科に留まらず、芸術・観光・環境・経済・災害など様々な広がりを見せています。
(編集: M2 神谷, M1 中戸)

凡例

氏名 [敬称略] 2017
大学名, 学部学科, 役職

学部卒業年
修士修了年
博士中退年
博士論文提出年
※博士論文を出さ
れていない方のみ
博士在籍年記述

山形県

高谷 時彦 1976
東北公益文科大学大学院 教授

小林 敬一 1991
東北芸術工科大学デザイン工学部 教授

宮城県

岩田 司 1988
東北大学災害科学国際研究所 教授

原田 栄二 2002
東北大学大学院工学研究科工学部 助教

埼玉県

鈴木 隆 1983
獨協大学外国語学部 フランス語学科 教授

千葉県

北沢 猛 1977 (2009年逝去)
東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授

出口 敦 1989
東京大学大学院新領域創成科学研究科 教授

北原 理雄 1977
千葉大学大学院工学研究科 名誉教授

福川 裕一 1978
千葉大学工学部デザイン工学科 名誉教授

東京都(市部)

吉川 仁 1975
首都大学東京都市環境学部 特任教授 (退官)

鳥海 基樹 -2001.9
首都大学東京都市環境学部 准教授

岡村 祐 2008
首都大学東京都市環境学部 准教授

神奈川県

菅野 博貢 1994
明治大学農学部農学科 准教授

鈴木 伸治 1999
横浜市立大学国際総合科学部 教授

野原 卓 2009
横浜国立大学大学院都市イノベーション研究院 准教授

文京区

坪原 紳二 1988
跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 准教授

窪田 亜矢 1999
東京大学工学部都市工学科 特任教授

樋野 公宏 1998
東京大学工学部都市工学科 准教授

後藤 智香子 2011 ※旧姓: 鈴木
東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻 特任助教

新宿区

野澤 康 1993
工学院大学建築学部まちづくり学科 教授

遠藤 新 2004
工学院大学建築学部 教授

千代田区

大江 新 1974
法政大学工学部 名誉教授

東京23区

港区

中野 恒明 1974
芝浦工業大学システム理工学部環境システム学科 名誉教授

八束 はじめ 1975
芝浦工業大学工学部建築工学科 名誉教授

篠崎 道彦 1990
芝浦工業大学デザイン工学科 教授

桑田 仁 1997
芝浦工業大学デザイン工学科・建築学科 教授

前田 英寿 2005
芝浦工業大学デザイン工学科・建築学科 教授

垣内 恵美子 2002
政策研究大学院大学 教授

世田谷区

小林 重敬 1966
東京都市大学都市生活学部 教授

中島 伸 2012
東京都市大学都市生活学部 講師

江東区

松田 達 1997
武蔵野大学工学部建築デザイン学科 講師

※情報は2017/6/30現在のものです。情報収集の中でどの大学で教鞭をとっているかわからなかった方は抜けている場合があります。
※海外で役職がある方は情報を得られた範囲で掲載しています。
※都市設計研究室/都市デザイン研究室を出たタイミングのみを掲載しています。学部/修士/博士のいずれかを他大学で卒業している場合、その大学名と卒業年などは未掲載です。



現在をつくる礎 ―各地の研究室から― - 研究室の系譜 特集 3-

So Many Laboratories, So Much Interests!

卒業生が持つ研究室はどのような研究テーマに向き合っているのか。また、自身で研究室を持ち、学生を教える立場に立つにあたり、学生時代の出来事は現在にどのような影響を与えているのか。他の大学で研究室を持つ7人の先生方から寄稿形式でお話を伺いました。同時に、西村先生からはそんなかつての卒業生がいた頃の都市設計研究室/都市デザイン研究室と現在の研究室の違いや、これからのあり方についてコメントをいただきました。

現在の都市デザイン研究室について - 西村先生から -

〈プロジェクトに見る研究室の変化〉 僕らがプロジェクトをやっていた時は全体で1〜2つくらいだったけど今は随分多様になっていますね。最初は僕のところに来る仕事の中で研究になりそうなものだけをやっていたんですが、今は同じようなことを中島君や永野君もやっていますね。色々な人のつながりが広がっているので、自然な変化なのかなと思います。色々な意味で選択肢が増えたのはいいことですけど、僕らの時代は1つのプロジェクトに集中してエネルギーをかけ、様々な角度から攻めていた。君たちのこだわりがどこまであるのか僕にはわからないけど、数が多いと時間も限られるので、プロジェクトへの取り組み方は違ってきているのかもしれないね。でもプロジェクトに完全に縛り付けられる必要はないので否定的に見ているわけではないですが。	〈変わらないこと〉 共同作業があるからか、研究室内の仲がいいですね。やはり一人一人別のことをやってもその程度の付き合いはあるけれど、プロジェクトにはお互い助け合うところが必要ですから。あと女性が多いからか研究室内でカップルが誕生することが多い。今までの都市工の歴史の中で一番多いのではないのでしょうか。	
	〈これからの研究室〉 これからのことは次の人が決めることですが、研究室の仲が良いのには僕自身が教われたので大事にしてほしいです。修士の人はこれからどちらへ行くか決まる前だから可能性が色々広がっているわけですが、逆に言うと何処へ進むか悩む不安定な時期でもあるので、メンタル面をサポートできるようなシステムは大事だと思います。	

1988.3 学部卒 /1990.3 修士卒 /(神戸大学博士課程修了)

 坪原 紳二 先生 跡見学園女子大学 観光コミュニティ学部 准教授 【経歴】 1996.4-1997.3 三重短期大学生生活科学科専任講師 1997.4-1999.3 三重短期大学生生活科学科助教授 1999.4-2005.3 熊本県立大学環境共生学部助教授	都市設計研究室所属時の思い出 西村先生が東大に赴任されたのは、私が4年生で卒業計画を作っていた時だと思います。ただこれはもう4年の後半に入っていたので、先生から本格的に指導を受けるようになったのは、修士に進んでからでした。建築学会の関東支部の会合にお誘いいただき、そこで、その後心の支えとなってくださった早稲田大学の倉田直道先生や後藤秀昭先生とお会いすることができました。この関東支部の会合での一番の思い出は、初めて出席した時、西村先生ご自身が発表者で、イギリスのシビクトラストについて発表してくださったことです。当時、都市計画における市民の役割のような問題は大学の講義ではほとんど扱われていなかったため、大学に入ってから初めて感激しながらノートを取っていたのを覚えています。
西村先生との思い出 私はかなり自己流でやる方で、あまり大学にも来ていなかったのですが、修士になった当初、研究室会議にどうやって臨むべきかもよく分かっていませんでした。修士1年は研究テーマを発表するようにと先輩から言われ、当日は、ノートに手書きの汚い字で自分の思いを書いておいただけでした。都市デザインに住民が参加することが不可欠だといったことや、そのための具体的な方法を研究テーマにしたいといったことが書いてありました。会議の直前に、全員にレジュメを配らなければならないことを知って、慌ててその手書きのメモをコピーして配りました。自分の番が回ってきて、怒られること覚悟で発表をしていて、ちょっと顔を上げて西村先生の様子を見て驚きました。その汚い私のコピーを真剣なまなざしで読んでくれていたのです。発表が終わると先生が真っ先に、「坪原君の言っていることは非常に大事だと思う」というようなことを言ってくださいました。この鶴の一声(?)のおかげで資料の汚さは全く問題にならず、むしろ積極的な意見がたくさん出て、意気揚々と会議を終えることができました。この研究室会議のことは今でもよく覚えていて、自分が教員になって学生のレジュメやレポートを見る時は、西村先生の当時の様子を思い浮かべながら、ばかにせずに常に真剣に読むように心がけています。	

※坪原先生の研究室は現在所属している学生がいないため、当時の思い出を中心に原稿をいただきました。

1988.3 学部卒 /1990.3 修士卒 /1995.5 博士論文提出

 三島 伸雄 先生 佐賀大学大学院 工学系研究科 教授 【経歴】 1995.11-1998.11 佐賀大学 理工学部 講師 1998.12- 2007.3 佐賀大学 理工学部 助教授 2007.4- 2010.3 佐賀大学 理工学部 准教授 2010.4- 2013.1 佐賀大学大学院 工学系研究科 准教授 2013.2 佐賀大学大学院 工学系研究科 教授	 現在の研究室について 土木と建築が融合する都市工学科の建築系アーバンデザイン研究室です。地域空間デザインに関心のある学生が、地域性の発見、修理修景、ICT防災、都市史などの研究を行っています。市町や住民との強い関係の中で依頼されるプロジェクトも多くあります。 【教員】三島伸雄教授(都市設計)、洲上貴由樹助教(歴史意匠)【D】2人【D 研究生】1人【M2】6人【M1】5人【M 研究生】1人【B4】7人【B 短期留学】2人	
地域密着型アーバンデザイン 都市設計研究室所属時の思い出 渡邊定夫先生、山田学先生、西村先生の3先生に博士課程に主指導していただく結果になった唯一の学生だったかもしれません。渡邊先生には幕張新都心住宅地のデザインガイドライン策定に取り組ませていただき、山田先生にはウィーン留学中に景観分析を指導していただき、西村先生にはウィーンの保存地区への視座を学びました。博士論文は、その3つの視点が合わさったものになりました。博士課程中にウィーン工科大学に留学できたのは、本当に貴重な経験でした。1年間で語学だけで精一杯だったため、無理をお願いして1年半伸ばしました。佐賀大学赴任後も、文科省在外研究員でウィーン工科大学に留学し、学生も帯同して研究できました。今年も、派遣と受入で国際ワークショップを実施します。ウィーンとの繋がりが今でも教育・研究の大きな礎になっています。		これからの研究室 地方国立大学だからこそ、県内市町と濃密な関係を持ち、継続したプロジェクトを持ち続け、それを異分野融合研究に結びつけています。肥前浜宿では茅葺町家や公民館に宿泊して国際ワークショップも行っています。

1991.3 学部卒 /2008.10 博士学位授与

 服部 敦 先生 中部大学工学部 都市建設工学科 教授 【経歴】 1991.4-2007.3 建設省(現・国土交通省)内閣官房、内閣府	 現在の研究室について 土木系の学科の中にある計画分野の研究室であり、8年前に都市デザインの教育・研究をはじめて導入しました。比較的幅広い関心を持った学生が所属を希望します。大学院生を中心に、まちづくりの現場での事業の企画・マネジメントの活動を通じて、研究を進めています。 【教員】服部敦教授 【D】1人【M2】2人【M1】1人【B】8人	
Urban Activity Design 都市設計研究室所属時の思い出 西村先生に伝授いただいた「地酒」を活かした交流技術は、まちづくりの現場に根ざした研究活動の基盤となり、継続的に関わる現場は、高蔵寺ニュータウン、豊川市、名古屋市、四日市市、沖縄の離島・北大東島などに広がっています。北大東島では学生時代のテーマである産業遺構の保存に取り組み、国の史跡指定から重要文化的景観選定へと歩を進めています。大学で学んだ最も大切な視点は、建築から都市、広域へと至る異なるスケールを自由に行き来する柔軟性を持つことです。スケールの連続性に身を置き、眼前の空間・活動に埋没しないことが都市デザイナーの大切な資質です。国家公務員の経験を経て「システムは変えられる」「省庁の枠を超えて活用可能な財源がある」と身をもって知りました。まちづくり現場ではシステム・財源の枠をはめがちですが、「限界を設けない」まちづくりの姿勢を貫いています。		これからの研究室 日本では、都市計画・都市デザインの専門人材の流動性が低いことが人材育成の課題の一つです。研究室の活動が産官学公のセクター間の人材の流動性を高める一助になることがこれからの目標です。



木下 光
先生

関西大学
環境都市工学部
建築学科 教授

【経歴】

1996.4-2000.3 関西大学工学部建築学科助手
2000.4-2005.3 関西大学工学部建築学科専任講師
2005.4-2007.3 関西大学工学部建築学科助教授
2007.4-2016.3 関西大学環境都市工学部建築学科准教授



2016 年教授昇進を
卒業生と在校生が祝ってくれました

【教員】木下光教授

【M2】5 人 【M1】6 人 【B】6 人

現在の研究室について

学生は各自の関心に応じ、国内やアジアを対象にして身体を介したフィールドサーベイを行い、空間や社会を理解した後『①論文やブックレットにまとめる』『②ワークショップやインスタレーションを通し人々と交わる』『③設計競技等で形や空間を問う』のいずれかに取り組みます。

-Research as Design, Design through Research-

都市設計研究室所属時の思い出

私は 1992 年から大学院修士・博士課程の 4 年間、所属しました。当時から多彩な人々が先生の周りに集っていましたが、先生が AIT から戻られた直後ということもあり、研究室はアジア研究の拠点としても評価されていました。先生や先輩に導かれ、私は香港研究を始めました。先生との縁がなければ、アジア研究を志すことはなかったと思います。現在、香港研究は、シンガポール・大阪も事例に公設市場やストリートマーケットを通した都市居住論や公共建築論へと展開しています。公共空間のデザインとマネジメント研究である公共空間論では、都市政策の組織・制度と空間の関係性を論じます。近年、瓦に着目し、素材から建築や都市の風景を再構築する研究を行っています。これらの研究を通して、アジアの都市像とは何かという問いに応えたいと思っています。

これからの 研究室

建築や都市の概念を拡張し、モノ×ヒト＝コトの観点から、都市と建築、研究と設計を分けることなく、空間と共に時間を重ね、土木・ランドスケープ・都市計画・建築を包含する都市デザインを模索しています。



花澤 信太郎
先生

静岡文化芸術大学
大学院
デザイン研究科 教授

【経歴】

1992-2006 SHIN 建築設計事務所
1998-2006 岐阜坂アーキテクト / 共同主宰
2009.4-2014.3 静岡文化芸術大学准教授



研究室レイアウトの様子

【教員】花澤信太郎教授 【B】4 人

現在の研究室について

デザイン学科 建築・環境領域の研究室の一つです。教育の特色は最初の 2 年でデザインについての基礎的な学習を積んだ後に、デザインの各領域に進路を進める点にあり、学生は総合的なデザインの観点から建築や都市についてのデザインを学びます。

地域に根ざし、デザインを楽しむ

都市デザイン研究室所属時の思い出

当時の指導教官は西村先生と北沢先生でした。お二人とも非常に多忙で授業以外でお会いできる時間は限られていましたが、その時間の中で大変多くの事を教えて頂きました。今行っている研究も、そのビジョンは西村先生に、方法論は北沢先生に示して頂いたものです。助手（現在の助教）には遠藤さん、野原さん、中島さんがおられ、大学院生も学部生もみな元気にあふれたメンバーでした。研究室会議や博士課程在籍者の勉強会である D ゼミなどの場で、先生がたや仲間から色々な事を学ぶ事ができた日々はかけがえのない財産です。

これからの 研究室

研究室のメンバーは、みな故郷を想う気持ちとデザイン力を持ち、学部在学中からリノベーションなどのデザインを実現し活躍している人もいます。このような気持ちと能力を将来のまちづくりに繋げていきたいと思っています。



岡崎 篤行
先生

新潟大学
工学部工学科
教授

【経歴】

1995.4-2000.9 東京都立大学工学部建築学科 助手
2000.10-2001.10 新潟大学工学部建設学科 講師
2001.11-2013.3 新潟大学工学部建設学科 准教授



古町芸妓を呼んで老舗料亭での追いコン

【教員】岡崎篤行教授、松井大輔助教

【D】1 人 【M2】4 人、【M1】6 人 【B4】8 人 【研究生】1 人

現在の研究室について

新潟大学は戦前の医科大学を前身とする国立 6 大学のひとつです。日本海まで徒歩 10 分と恵まれた自然環境にあり、砂浜で BBQ をやる「浜コン」は新大(しんだい)文化と言われています。研究室所属学生の約半数は、同じく OB の松井助教が指導する学生です。

新潟の町屋から海外の制度まで

都市設計研究室所属時の思い出

東工大の卒論生だった時に参加した「全国町並みゼミ角館大会」で西村先生や研究室メンバーに出会いました。それが人生の転機でした。修士の時は、飛騨古川や今井町のプロジェクトに参加し、博士課程から東大に移籍しました。先生の本籍があった（建て替え前の）先端研に居たのですが、中庭でヤギが草を食んでいる長閑な風景でした。博士課程では、飛騨古川の景観基本計画と景観条例案の策定に、後輩達と取り組みました。月に 4 回メチャクチャハードな生活でしたが、今の自分の基盤になっています。当時は Mac が不安定で、すぐクラッシュするので、徹夜で復旧に当たることもしばしばでした。1 年で東京都立大高見沢研の助手になってからも、飛騨古川のデザイン・ガイドライン策定や街環事業、アメリカの歴史的環境保全制度調査などで、西村先生とご一緒させて頂きました。海外を含めた制度研究は、今も学生と一緒に続けています。

これからの 研究室

新潟で始めた町屋群の基礎的悉皆調査や花街空間の全国共同研究を形にしたいです。建築学会の優秀卒論・修論賞を 9 回受賞している優秀な学生達と一緒に、知られざる歴史的湊町・新潟の魅力を発信していきます。



阿部 大輔
先生

龍谷大学
政策学部政策学科
准教授

【経歴】

2006.9-2009.1 政策研究大学院大学 研究助手
2009.1-2011.3 東京大学都市持続再生研究センター 特任助教



昨年の「都市アーキスト会議」の様子
(近畿圏の建築系研究室との合同設計演習)
3 ヶ月強の長丁場、チーム丸となって取り組みます

【教員】阿部大輔准教授

【B4】11 人 【B3】13 人 【B2】13 人（ゼミは 2 年後期から。文系学部は大学院進学者が少ないのが悩み）

現在の研究室について

素直で熱心な学生が多いです。社会科学系学部のため、学生たちは都市についての知識も経験もほぼゼロの状態です。ゼミに入ってきます。泳ぎ方も知らぬまま、ゼミ生たちは他大学建築系ゼミとの合同設計演習や各種まちづくりプロジェクトといった荒波に放り込まれます。結果、状況によっては週 7 も厭わぬハードなゼミとなります。

何事にも果敢に挑戦する曲者ゼミ

都市デザイン研究室所属時の思い出

院生室で過ごした風景も懐かしいですが（研究室会議のたびに同期のみんな徹夜したり ... 大変非効率的でした（笑））、夜行バスに揺られながら何度も通った鞆での調査風景が脳裏に焼きついています。都市がどうあるべきか、調査先での時には夜を徹して交わした数々の議論が、私の専門家としての基礎をつくったといっても過言ではありません。思えば、西村先生、北沢先生の都市へ注ぐ愛情あふれる眼差しの有りように憧れ、自分の可能性を少しでも広げようとした学生時代でした。先生方だけでなく、多士済々な先輩後輩、助教に戻った時に過ごした学生のみなさんとの真剣勝負の中で、都市というフレームを通して社会を粘り強く変革していく技術が都市デザインである、ということを叩き込まれたように思います。今度は京都で縁のあった学生たちにそのエッセンスの一部でも何とか還元できないかと試行錯誤する日々です。

これからの 研究室

地縁をベースとしたまちづくりが盛んな京都ですが、じつは都市デザインを専門的に研究する研究室は限られています。都市デザインの研究と実践の両者において京都で着実な信頼を置かれる研究室を目指したいです。

都市デザイン研究室 国土交通大臣賞

15年ぶり2度目

第19回「まちの活性化・都市デザイン競技」



受賞作品を背に笑顔で写真撮影に応じるチームメンバー（左から、田中、永野助教、三文字、神谷、飯田）＝16日午後、すまい・るホール

東京大学都市デザイン研究室の永野真義助教、修士2年神谷安里沙、三文字昌也、田中雄大、学部4年飯田航平が、まちづくり月間全国的行事実行委員会、(公財)都市づくりパブリックデザインセンターが主催する第19回「まちの活性化・都市デザイン競技」にて、最優秀賞である国土交通大臣賞を受賞した。都市デザイン研究室の本設計競技での国土交通大臣賞受賞は、平成14年の第4回以来15年ぶり2度目の快挙。6月16日(木)開催の「まちづくりと景観を考える全国大会」にて、国土交通大臣賞の表彰が行われた。

本設計競技は、北の丸公園から飯田橋駅を含む約66分の地区を対象として、風格あるランドスケープと地域の回遊性向上に資する地区全体の都市デザインとその運営のアイデアを広く募った。都市デザイン研究室有志メンバーは、昨年の年末から今年の1月中旬までの短い期間で集中的に取り組んだ。対象地の飯田橋は大学から近かったこともあり、調査やミーティングで何度も敷地に足を運び、提出期限間近まで粘り強く考え抜いた案であった。

表彰式では、設計競技だけではなく、全国のまちづくり活動の表彰も同時に行われ、柏の葉アーバンデザインセンター(UDCK)の取り組みや、横浜国立大学都市計画研究室の携わる石巻市のまちづくり活動も表彰され、昨年度三國プロジェクトのUDCK視察でお世話になった三牧浩也副センター長や、都市デザイン研マガジンvol.6特集号で協力して頂いた野原卓准教授の姿も見えた。さらに、空間計画研究室の出口教授による基調講演が行われ、都市デザイン研究室卒業生の顔ぶれが揃った。賞金50万円の使い道についてメンバーらは、「まだ決まっていなくて、調査旅行などの有意義な使い道を考えている」と答えた。とは言いながらも、「天下」を取った表彰式終了後、早速有名ラーメン店「天下一品」で普段は頼まないトッピング付きのラーメンを頼み、ささやかな贅沢を楽しんだという。

受賞作品と講評は、(公財)都市づくりパブリックデザインセンターのホームページに掲載されている。



壇上で賞状を受け取る三文字(右)

UDCK副センター長の三牧氏(右)

会場に展示される各部門の受賞作品

これからの都市デザインについて講義を行う出口教授

Information

Pickup

-ピックアップ報告

手賀沼PJ 計画立案に向けてサポート。

7月上旬の基本計画完成に向けて励んでいます。14日に中間報告を柏市役所にて市職員、環境コンサルタント、edge hausの方々に行いました。現地調査、週1でのエスキス、初めての飲み会など、メンバーとも濃い付き合いです。(岡山)

高島平PJ 新フェーズを前に。

いよいよ当プロジェクトは、調査段階から住民の方を巻き込んだ実践段階に移行します。今月は、その初回企画に向けて、関係者との打ち合わせや各種資料の作成などの準備を進めました。(中村)

Project Headlines

-PJ近況早わかり-

Web記事もご覧ください。http://ud.t.u-tokyo.ac.jp/ja/blog/



Archives

-6月のweb記事

Workshop of 富士吉田PJ

研究生のFanから、この地域の形成や「御師」とは何か、を紹介し、現地ワークショップについて報告する。

手賀沼プロジェクト、始動!

作業の進む手賀沼プロジェクトの具体的な課題と現地調査の様子を、ブログ初投稿のM1岡山がレポート。

カトマンズ現地報告

3年目となるカトマンズPJの今年度初の現地調査。地域研M1永門くんが寄稿いただき、濃い行程を紹介。

都市縮退シンポジウム 発表報告

アメリカと日本の様々な事例を濃度高く紹介したシンポジウム。登壇されたD3矢吹さんにご報告いただく。

7月の予定

- 7/8 高島平PJ プレWS開催
- 7/11 研究室会議
- 7/26-28 夏期ジュリー

✧ 編集後記

最後の主担当という事で気合を入れて取り組んだこの特集号。卒業生の先生方が持っている研究室ってどこにいくつあるのだろうと軽く思ったことから始まりました。今回卒業生の先生方の足取りを中心に追いかけてみて、この研究室の歴史の深さには改めて圧倒されました。一方調べたことに時間がかかった結果、各地に研究室を持つ先生方への原稿依頼はバッチリ前になっただけで、皆さには本当に迷惑をおかけしました。大変ご多忙の所快く依頼を受けて下さった先生方、本当にありがとうございます。(神谷)

